

令和5年度事業報告

I. 企画委員会、役員会、第30回総会の開催

1. 企画委員会の開催

日時：令和5年6月5日（月）

開催形態：Onlineによる開催

第30回総会の議案（①役員の改選について、②令和4年度事業報告、③令和4年度収支決算報告、④令和5年度事業計画（案）、⑤令和5年度収支予算（案）、及び、令和5年度事業の具体的な考え方（セミナー、講演会等）、その他研究会の運営等に係る事項について検討を行った。

2. 役員会の開催

日時：令和5年7月5日（水）

開催場所：TKPガーデンシティ仙台

第30回総会の議案、その他研究会の運営等に係る事項について審議いただき、総会提出議案が承認された。

3. 第30回総会の開催

日時：令和5年7月5日（水）

開催場所：TKPガーデンシティ仙台

<議事>

- ① 役員の改選について
- ② 令和4年度事業報告
- ③ 令和4年収支決算報告
- ④ 令和5年度事業計画（案）
- ⑤ 令和5年度収支予算（案）

提出した議案はすべて承認された。

II. 産学連携支援事業

1. ニーズ・シーズの収集・提供

本事業における1)～6)の支援業務のため、民間企業、大学、国研・独法研究機関、公設試験場、産学連携機関、農業生産者・団体、行政機関等の担当者に対して、訪問、面談、メール・電話等の活動を行った。その実績は以下のとおりである。

訪問、面談、メール・電話対応の件数の推移

活動形態	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計	前年度
訪問	7	8	6	5	6	9	7	2	2	4	10	9	75	84
面談	実面談	0	0	2	2	0	1	0	0	0	1	0	6	16
	web面談	0	0	3	0	1	0	2	0	4	3	0	13	24
	計	0	0	5	2	1	1	2	0	4	3	1	19	40
メール・電話	1	0	1	2	1	3	2	5	5	4	1	0	25	54
計	8	8	12	9	8	13	11	7	11	11	12	9	119	178

訪問、面談、メール・電話対応の機関種別実績

活動形態	民間		大学		国研・独法		公設試		産学機関		農業生産者・団体	行政機関		その他		計	
	異分野		異分野		異分野		異分野		異分野			異分野		異分野		異分野	
訪問	24	2	2	1	7	0	1	0	0	0	31	6	0	4	0	75	3
面談	実面談	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	1	6	2
	web面談	6	4	2	0	2	0	1	0	0	0	1	0	1	0	13	4
	計	9	5	3	0	2	0	1	0	0	0	3	0	2	1	19	6
メール・電話	5	0	1	1	2	0	0	0	0	0	6	9	0	2	0	25	1

訪問等の活動により収集した研究開発・事業化に関するニーズの一例は以下のとおりである。

	機関	分野	ニーズの内容
1	民間企業	IT	施設わさびの病気の診断
2	民間企業	食品	パン用小麦の普及
3	生産者団体	食品	ゆずのブランド化の方法
4	民間企業	食品	もち小麦を用いたうどんおよび餃子の開発
5	民間企業	農業	木質燃焼灰の肥料化技術

訪問等の活動により収集した研究開発・事業化に関するシーズの一例は以下のとおりである。

	機関	分野	シーズの内容
1	公設試験場	農業	わさびの病気診断技術
2	国研	農業	パン用小麦の育種と栽培法
3	国研	農業	もち小麦うどんの特性評価
4	大学	農業	木質灰の安全性と活用技術
5	普及機関	農業	りんどうの自動選別技術

2. 産学連携等のためのマッチング

支援活動の結果、マッチングに至った事例は以下のとおりである。

・事例①

A企業より、水耕わさび栽培の防除対策について相談を受けたため、公設試験場の専門家を紹介し、対策を指導してもらうなどマッチングを行った。

・事例②

B県でスマート・テロワールの取り組みを検討したいので専門家を紹介して欲しいとの依頼を受け、C大学でスマート・テロワール事業を展開しているD教授を紹介し、マッチングさせた。

3. 研究開発資金制度の紹介等

1) 研究開発資金の取得支援

研究開発資金の取得支援を行った実績は以下の表のとおりである。

	事業名	課題名	代表機関	採否
1	R5オープンイノベーション研究・実用化推進事業（生研支援セ）	みどりの稲作技術	国研	採択
2	R6オープンイノベーション研究・実用化推進事業（生研支援セ）	木質バイオマス灰の肥料化技術	大学	2次審査中
3	〃	超多収低アミロース米の育種	公設試験場	〃
4	〃	広域適応可能な直播技術の開発	大学	〃
5	〃	穀物残差を用いた断熱材開発	民間企業	〃
6	R6戦略的スマート農業技術の開発・改良（生研支援セ）	畜舎での牛のモニタリング技術の開発	大学	不採択

2) 事業化可能性調査の実施

研究開発資金への申請を前提として、代表機関が統一的に実施した事業化可能性調査において、以下の活動を実施した。

- ・課題①「木質バイオマス灰の肥料としての循環利用と環境負荷低減に関する事前調査」

関係機関：大学 3，民間企業 1，技術関連団体 1

活動内容：関係機関を招集したワークショップ（1回）を開催し、現地調査（1回）を実施した。

結果：令和6年度オープンイノベーション研究・実用化推進事業への申請に繋がった。

4. 商品化・事業化の支援

1) 研究支援者等の活動

イノベーション創出強化研究推進事業等において、それら事業への獲得支援を行い、採択された課題について、コーディネーターが研究支援者等として研究グループに携わり、商品化・事業化に向けた支援を継続した。支援した課題は以下のとおりである。

	事業名	採択年度	課題名	代表機関
1	イノベーション創出強化研究推進事業	R1年度	畑作の省力化に資する生分解性プラスチック分解酵素の製造技術と生分解性農業資材利用技術の高度化	農研機構 農業環境研究部門
2	新事業開発・アライアンス助成事業	R4年度	新規生地特性を有する「モチ小麦：もち姫」を用いた新食感「もちもち姫うどん」及び「もちもち姫餃子」などの開発	賢治の土株式会社

2) 商品化・事業化の支援

支援活動の結果、商品化・事業化に至った事例は以下のとおりである。

<商品化・事業化に至った事例>

・事例①

新規生地特性を有する「モチ小麦：もち姫」を用いた新食感の食品開発を支援して、同品種で製造の「もちもち姫うどん」が製品としてショッピングモール等で販売が開始された。

・事例②

新規生地特性を有する「モチ小麦：もち姫」を用いた新食感の食品開発を支援して、同品種で製造の「もちもち姫餃子」が商業施設の飲食コーナーでメニューとして提供が開始された。

<商品化・事業化に向け支援を進めている例>

・事例①

福島県の放射能汚染地域の復興を支える重要な作物の一つとしてサツマイモがクローズアップされている。そこで、東北ハイテク研では、福島県の複数の市町村、企業からの依頼を受けてサツマイモ栽培技術を指導するとともに、産地化・商品化・事業化に向け支援を行っている。

・事例②

昨年のアグリビジネス創出フェアで相談を受けたスモールスマート農業技術の実践について、E県F地方のりんどう生産組織から活動支援を依頼されるとともに、りんどうの出荷選別をAI技術により合理化するためのシステム開発について支援を要請され、競争的研究資金の獲得を含め支援を行っている。

・事例③

G市のゆず研究会より「ゆず」のブランド化戦略の策定について相談を受け、多様な商品化の可能性評価とブランド価値を高める戦略策定の支援を行っている。

5. セミナー等の開催状況

異なる分野の革新的な発想や先端技術を活用して、東北農業の技術革新や農業ビジネスに取り組むための機会を農林水産業者、食品産業事業者、研究機関・行政・普及などの関係者に提供する場とするためのセミナー、相談会等を開催した。

セミナー、相談会等の開催回数は11回で、参加者総数は1,397名であった。開催形態は、オンライン+対面（ハイブリッド）が3回、オンライン配信及び対面型で各4回実施した。

【氏名の敬称省略】

1) 麦秋を体感し、「もちもち姫うどん」を味わう会！

日時：令和5年6月16日（金）10：30～14：30

形態：リアル

会場：JAいわて中央紫波支所 会議室、現地圃場（岩手県紫波郡紫波町）

次第

(1) 圃場見学

- ① 紫波町の農業の魅力紹介（バス移動中） JAいわて中央 村上博範
- ② 「もち姫」の特徴（圃場で説明） 農研機構東北農業研究センター 池永幸子
- ③ 「もち姫」生産の取り組み（圃場で説明）
志和「もち姫」生産集団代表 高橋栄悦

④ 参加者と生産者の質疑応答

(2) 「もちもち姫うどん」を味わう会

- ⑤ 「もち姫」でスイーツ作り実演と試食 あぐりちゃや 代表 細川栄子
- ⑥ 「もちもち姫うどん」を味わう！
もち姫商品化プロジェクト代表・賢治の土 畠山武志
- ⑦ パネルディスカッション～もち姫の今とこれからへの期待～
司会 東北ハイテク研究会 門間敏幸

結果：参加した消費者はマイクロバスに乗車し「フィールドツアー」に出かけ、もち姫の栽培や管理の仕方などを説明し、意見交換を行った。その後、「もち姫うどん」の試食を行い、参加者がお互いに試食の感想などを語り合った。パネルディスカッションでは、4名のパネリスト（研究者、生産者、販売者、地元食研究家）から、もち姫の開発・生産・販売・ブランド化について意見が述べられた。試食後の感想では、ツルツル・モチモチ食感の麺の美味しさが驚きをもって語られた。総じて、新触感の「もち小麦のうどん」に高い評価を得ることができた。

（参加者 50名）

2) スマート農業実証プロジェクト（水田作）技術検討会「スマート水管理」

日時：令和5年6月20日（火）13:15～16:30

形態：ハイブリッド（リアル+オンライン（Zoom ライブ配信））

会場：いわて県民情報交流センター（アイーナ）小田島組☆ほ～る（岩手県盛岡市）

次第

- ① みどり戦略・スマート農業の取組における自動水管理システムの効果と課題
農研機構中日本農業研究センター 大下泰生
- ② スマート配水技術の確立－個別型 ICT 水管理機器と集約型水管理システム－
農研機構農村工学研究部門 新村麻実
- ③ 大規模経営体に対応した冷害回避のための水管理技術の実証
青森県産業技術センター農林総合研究所 千葉祐太
- ④ 自動水管理システムの活用による水管理の省力化と水位安定化の実証
福島県農業総合センター 根本和俊 4

総合討議：座長 東北ハイテク研究会 門間敏幸

結果：大下氏からの話題提供を受けて、山形県の奥山農園における個別型 ICT 水管理と集約型水管理システム、青森県の（株）十三湖ファームでの冷害回避のための深水管理技術、福島県の（株）新妻有機農園における雑草制御水管理技術についての実証結果が実証を担当する研究者から報告された。総合討議では、実証経営体の代表者から実証の効果と課題について報告された。以上の報告を受けてフロアとオンライン参加者からの質問を中心とした総合討議が行われた。自動水管理システムの労働時間節減以外の米の収量や品質に及ぼす効果、冬場の器機の管理、施設を設置する最適な圃場規模、品種・栽培方法・生育ステージごとの水管理の可能性、現在の水管理システムの完成度と課題、今後の開発方向等について有意義な意見交換が行われた。（参加者 223名）

3) 講演会 東北地域における農業を核とした産学連携活動のフロンティア！

日時：令和5年7月5日（水）14:15～16:00

形態：ハイブリッド（リアル+オンライン（Zoom ライブ配信））

会場：TKP ガーデンシティ仙台（宮城県仙台市）

次第

- ① 庄内スマート・テロワールの挑戦
－地域共創活動による循環型農村経済圏の構築－
山形大学農学部附属やまがたフィールド科学センター 教授 浦川修司
- ② アグロエンジニアリング協議会の取り組み
－超高压処理によるギャバを多く含む大豆商品開発を例に－
アグロエンジニアリング協議会会長 鈴木康夫

質疑討論：司会 東北ハイテク研究会 門間敏幸

結果：スマート・テロワールの取り組みでは、地域の風土を活かしながら耕種農家と畜産農家の連携、農業者と加工業者の連携、加工業者と地域の小売店の連携によって地産地消を実現するための取り組みが紹介された。アグロエンジニアリング協議会の取り組みでは、農・食・エネルギーに関する事業化・商品化ニーズに対して、シーズとしてのエンジニアリング技術を橋渡しするための取り組みが紹介された。質疑討論では、ステークホルダーの連携意欲をどのように高めていくかという質問にたいしては、シーズ提供組織の真剣度が重要であることが強調された。また、商品化・事業化では、事業資金をいかに集めるかが重要であり、そのためには補助金だけでなく民間ファンドの活用が重要であることが論議された。さらに、地産地消に関して、グローバルな視点も重要ではないかという指摘が行

われた。(参加者 58 名)

4) セミナー 米食の価値を考える ―食料と健康の確保におけるお米の価値再考―

日時：令和 5 年 9 月 5 日 (火) 13:15~16:00

形態：オンライン (Zoom ライブ配信)

次第

- ① 米飯摂取を基本にした日本食の健康有益性
東北大学未来科学技術共同研究センター
プロジェクトリーダー・教授 宮澤陽夫
- ② 超積極的米利用～多様な米を多様な用途に～
秋田県立大学生物資源科学部教授 藤田直子
- ③ 実需者が要望する米の品質
伊藤忠食糧株式会社 米穀本部 米穀サポートチーム 安藤美紀子

質疑討論：司会 東北大学教授 藤井智幸

結果：3名の報告を受けて本研究会の企画委員長である東北大学の藤井智幸教授の司会の下で質疑討論を行った。参加者からは、機能性がある多様なお米が開発されている現状を初めて知った驚きと共に、①一般の消費者向けの PR・販売がどのように行われているか、②機能性成分については気象条件の変動や栽培の仕方の変動するのではないか、③生産農家をどのようにして確保しているか、という質問が寄せられた。また、安価な業務用米需要に対する生産現場での対応方向について質問が寄せられた。以上の質問に対して藤田教授からは、大学ベンチャーで生産・販売への対応を行っているため、現在は大量に生産できない現状が紹介され、予約販売、インターネット販売で計画的に対応しているとの回答があった。業務用米の実需ニーズへの対応のためには、収量を上げて対応することが重要であることが安藤さんから指摘された。(参加者 58 名)

5) セミナー 農林水産物・食品の輸出促進に向けた支援策と事例について

日時：令和 5 年 10 月 6 日 (金) 13:30~15:30

形態：オンライン (Zoom ライブ配信)

次第

- ① 農水省の輸出促進政策について ―GFP や輸出産地育成支援を中心に―
農林水産省 輸出・国際局 輸出支援課 課長補佐
輸出産地形成室 (GFP 事務局) 二瓶晴一郎
- ② 東北農政局における輸出拡大に向けた取り組みについて
農林水産省 東北農政局 経営・事業支援部 輸出促進課 課長 財津 博
- ③ 青森県でのリンゴおよび静岡県でのサツマイモに関する事業について
株式会社日本農業 りんご流通事業部 事業開発部門 部門長 永田玲士

意見交換：司会 東北ハイテク研究会 小巻克巳

結果：3名の報告を受けて、意見交換を行った。生鮮食品では賞味期限などが販売価格に影響しないか、国内向け品質と輸出向けで求められる品質は異なるのではないかなどの質問があり、これに対して輸送における品質の保持は極めて重要であること、手をかける栽培技術も重要だが輸送に経費が掛かるため大規模化や省力化で品質を維持しつつコストの低減を図ることが重要であるとの回答があった。農林水産省からは GFP の会員になることも技術相談をすることも無料なので是非興味のある方はうまく活用してほしいとの情報提供があった。今後の輸出拡大は避けて通れないものであり、そのために必要な情報提供ができたものと考えている。(参加者 30 名)

6) 有機農業シンポジウムー水田有機農業の成長に向けて

日時：令和5年11月15日（水）13：00～17：15

形態：ハイブリッド（リアル+オンライン（Zoomライブ配信））

会場：盛岡駅前会議場「マリオス」（岩手県盛岡市）

次第

① シンポジウムの趣旨について

戦略的スマ農プロジェクト SA2-106R「水田有機農業」代表研究者
農研機構東北農業研究センター 水田輪作研究領域 国立卓生

② 【基調講演】有機農業と農業技術

農研機構本部（兼）農研機構九州沖縄研究センター
みどり戦略・スマート農業コーディネーター 三浦重典

③ 【政策】みどりの食料システム戦略の実現と有機農業の拡大に向けて

農林水産省農産局 農産政策部 農業環境対策課長 松本賢英

④ 【生産現場】水田有機農業の先進事例

秋田県大潟村役場 農業アドバイザー 松橋秀男

⑤ 【農業技術】両正条田植機の開発

農研機構農業機械研究部門 無人化農作業研究領域 重松健太

⑥ 【農業技術】有機質資材の窒素肥効を見える化する無料アプリ

農研機構九州沖縄農業研究センター 暖地畜産研究領域 古賀伸久

⑦ 【国際動向】有機米の国際的な研究開発動向

茨城大学農学部附属国際フィールド農学センター 教授 小松崎将一

⑧ 【流通システム】有機農産物の新たな流通システム

やさいバス株式会社/株式会社エムスクエア・ラボ
代表取締役 加藤百合子

パネルディスカッション：水田有機農業の取組み拡大のために

ファシリテーター：東北ハイテク研究会 齋藤雅典

結果：本シンポジウムは、戦略的スマ農プロジェクト「水田有機農業」、農研機構東北農業研究センターとの共催で開催された。水田有機農業に関わる技術の現状、施策、現場での動向、新しい技術、国際動向、流通システムなどについての話題提供があり、その後、3名の水田有機農業実践者を加えてパネルディスカッションが行われた。主に生産者の目線から3つのテーマ「技術」・「販路」・「周囲の理解と支援制度」について議論が進められた。「技術」については、除草の省力化が大きな課題となるが、対応技術は生産圃場や地域（気候）ごとに効果も異なりカスタマイズが必要であることが再認識された。「販路」では、播種前契約を可能とするため個々の生産者や地域ぐるみの工夫が必要であるとともに、新規に有機農業を開始する生産者向けの有機農業技術研修制度も重要であるという意見があった。「周囲の理解と支援制度」では、農水省では現場の事例調査を踏まえ支援施策に活かすとの発言があった。また、長期的に有機農産物を評価する風土を育てるため、食育などの取組も重要だとする意見があった。（参加者 393名）

7) 競争的資金への応募に向けた説明会・個別相談会（第1回）

日時：令和5年12月12日（火）10：00～17：00

形態：オンライン（Zoom）

次第

① 競争的資金に関する説明会

- ・オープンイノベ事業やスタートアップ事業の説明 東北ハイテク研究会 門間敏幸
- ・オープンイノベ事業採択のポイント 農研機構東北農業研究センター 松波寿典

- ・経済団体の助成事業への応募事例 東北ハイテク研究会 星野次汪
- ・スマート農業関連事業についての説明 東北ハイテク研究会 小巻克巳
- ・東北経済産業局と関係機関の研究開発支援について 東北ハイテク研究会 齋藤雅典

② 競争的研究資金への応募に向けた相談会

農林水産省が実施の提案公募型の競争的研究資金（オープンイノベーション研究・実用化推進事業その他の競争的研究資金）等に応募を予定されている皆様に対し、研究資金制度の紹介、競争的研究資金への応募を支援（研究計画書の作成支援、ブラッシュアップ等）するため個別相談会を開催。

結果：始めの競争的資金に関する説明会において、オープンイノベ事業やスタートアップ事業の説明、本年度オープンイノベに採択された研究者の方からの説明、その他研究資金に関する説明を行った。

この後の個別相談会へは、公設試・民間・大学から各1件の申込があり、1課題あたり1時間程度で、それぞれの提案予定課題について応募書類の作成等について助言等を行った。相談者からは、引き続き応募に向け提案書の作成等に関する支援の要請があった。（参加者 25名）

8) 東北地域タマネギ栽培セミナー2024 ～動き始めた東北地域のタマネギ産地化～

日時：令和6年1月10日（水）13:00～16:30

形態：リアル

会場：いわて県民情報交流センター（アイーナ）小田島組☆ほ～る（岩手県盛岡市）

次第

① タマネギ生産のスマート化に対する期待

みらい共創ファーム秋田 代表 涌井 徹

② 東北タマネギ生産促進プラットフォームの取り組みについて

農研機構東北農業研究センター 研究推進部 田宮誠司

③ 東北地域タマネギ産地化推進のための取組

(1) りん茎含水率に着目した土壌水分のタマネギへの影響評価

農研機構東北農業研究センター 畑作園芸研究領域 山口千仁

(2) 東北地域に向けたタマネギ品種開発戦略

タキイ種苗株式会社 開発部課長 宇野浩克

(3) 東北地域におけるタマネギ直播栽培の取組

農研機構九州沖縄農業研究センター 技術適用研究チーム 松尾健太郎

(4) 東北でのタマネギ産地支援の取組

双日農業株式会社 取締役 本田欣之

パネルディスカッション：

座長 農研機構東北農業研究センター 畑作園芸研究領域長 佐々木英和

結果：東北地域で始まったタマネギ産地形成の取り組みと研究開発プラットフォームの結成と取り組みについて、涌井氏・田宮氏による総括的な話題提供が行われた。その後、4名の報告が行われた。

パネルディスカッションでは、東北地域におけるタマネギの産地化の方向と栽培技術開発の現状と課題について論議が行われた。なお、講演者の報告に対しては、タマネギ栽培に関心を寄せる企業、農業法人、農家からの質問が多く、東北地域においてタマネギ栽培に対する関心が高いことが実感できた。

（参加者 229名）

9) 競争的資金への応募に向けた説明会・個別相談会（第2回）

日時：令和6年1月22日（月）、令和6年1月25日（木）

形態：オンライン（Zoom）

次第：農林水産省が実施の提案公募型の競争的研究資金（オープンイノベーション研究・実用化推進事業その他の競争的研究資金）等に応募を予定されている皆様に対し、研究資金制度の紹介、競争的研究資金への応募を支援（研究計画書の作成支援、ブラッシュアップ等）するため、個別相談会を開催。

結果：民間・大学・国研から各1件の申込があり、1課題あたり1時間程度で、それぞれの提案予定課題について応募書類の作成等について助言等を行った。相談者からは、引き続き応募に向け提案書の作成等に関する支援の要請があった。
（参加者 9名）

10) セミナー 新潟県産小麦を活用した商品開発の現状と期待

日時：令和6年1月29日（月）13:00～16:00

形態：リアル

会場：新潟ユニゾンプラザ 中研修室（新潟県新潟市）

次第

① 新潟県における小麦の振興

新潟県農産園芸課 技師 渡邊大輝

② パン用小麦「夏黄金」の開発

農研機構東北農研センター 畑作園芸領域 池永幸子

③ 新潟県で栽培されている小麦品種の栽培特性

新潟県農業試験場 川上 修

④ 新潟県産小麦の商品開発の現状と期待

丸榮製粉株式会社 代表取締役 佐藤久栄

ブランジェリー ラ・ターブル オーナー 佐藤哲栄

Bakery MAA 代表 佐藤正之

マルエイファーム株式会社 代表取締役 大谷勝男

*** 小麦・大麦開発商品の試食会 ***

⑤ 商品開発の取り組み

(1) 岩手県におけるもち小麦「もち姫」の取り組み

東北ハイテク研究会 星野次汪

(2) 食用及び醸造用大麦の商品開発の取り組み

農研機構中日本農研センター 上越研究拠点 水田利用研究領域 長嶺 敬

情報交換会：司会 農研機構中日本農業研究センター 上越研究拠点

水田利用研究領域 島崎由美

結果：開始にあたって本セミナーの趣旨が説明された。セミナーでは、新潟県での小麦生産の状況と課題・小麦栽培のメリット、寒冷地向け小麦品種の紹介（星野が代理で報告）、新潟県で栽培されている小麦品種の栽培特性及び製パン特性や製菓特性の報告が行われた。続いて、新潟県の現地で活躍されている4氏から、新潟県産小麦の商品開発の現状と期待について、これまでの取り組みこれから取り組みたいこと、行政や研究機関への要望について報告が行われた。試食会では、3社から提供のハード系のパン、大麦ブレンドパン、クッキー等を試食しながら意見交換が行われた。商品開発の取り組みについては、星野・長嶺氏が紹介した。情報交換会では、小麦生産者が自ら生産した小麦の加工品を食べる機会がないこと、「ゆきちから」の高蛋白化追肥法、種子生産や赤かび病対策、種子生産体制など、積極的に話し合われた。（参加者 43名）

11) 水稲乾田直播・子実トウモロコシフォーラム 2024

日時：令和6年2月29日（木）10:30～16:00

形態：リアル

会場：いわて県民情報交流センター（アイーナ）会議室 804（岩手県盛岡市）

次第

- ① 基調報告：農研機構方式（プラウ耕鎮圧体系）水稲乾田直播栽培の概要・課題・展望について

農研機構東北農業研究センター 研究推進部 古畑昌巳

- ② 事例報告

- (1) 秋田県北秋田市（水稲乾田直播）

ホクヨウ農産株式会社 代表取締役 藤嶋健一

- (2) 岩手県北上市（水稲乾田直播）

株式会社西部開発農産 生産部長 清水一孝

- (3) 宮城県名取市（子実トウモロコシ）

農事組合法人U.M.A.S.I. 代表理事 大友寛志

宮城県亘理農業改良普及センター 先進技術班 大内信博

- (4) 宮城県涌谷町（子実トウモロコシ）

株式会社おいかわ 代表取締役 及川達也

涌谷町農林振興課（涌谷地域農業再生協議会） 藤崎幸治

- ③ パネルディスカッション（分科会方式）

- (1) 「水稲乾田直播」分科会

テーマ：乾田直播栽培における雑草防除と高位安定生産について

- (2) 「子実トウモロコシ」分科会

テーマ：生産－貯蔵－流通体系の相互連携に基づく普及推進策について

結果：基調講演に引き続いて4つの事例報告が行われた。その後「乾田直播」と「子実トウモロコシ」の2つに分かれて分科会方式でパネルディスカッションが行われた。質疑討論では、フロアの方々と話題提供者、技術開発を担当する研究者を交えて活発な討論が行われた。その中で、水稲の乾田直播技術は、かなり高度な技術であり、自己流ではなく、マニュアルをきっちり守って行うのが成功の秘訣であることが強調された。また、子実トウモロコシについては、まだまだ取り組みが浅く不安定であるが、海外産のトウモロコシと競争できる安価な生産・加工・貯蔵・流通システムの体系的な確立を支援できる技術開発の重要性が指摘された。（参加者 279名）

5) 技術交流展示会の開催等

独自開催はしなかったが、アグリビジネス創出フェア 2024 に出展し、東北地域での技術シーズ・研究成果等を展示した。